模擬授業観察によるICTを活用した学生フィードバック分析
―小学校外国語活動・外国語の指導技術の向上を目指して―

An Analysis of Students' Feedback using ICT devices through Observations of their Simulated Lessons
– To Improve their Elementary School English Teaching Skills –

佐藤　大介[*1]・福島　治子[*1]
Daisuke SATOH・Haruko FUKUSHIMA

Abstract

The purpose of this study is to consider approaches to improve teaching technique/skills of university students who are in teacher training program. Especially, we are concerned about their viewpoints in observations of their simulated lessons. An analysis of students' feedback using ICT devices, such as PF-NOTE and Moodle, was performed to clarify what students emphasize on through observations for their simulated lessons. Data were gathered from 40 students in two ways: (1) Spontaneous feedback (responses) on PF-NOTE and (2) selective and descriptive feedback on Moodle.

It was found from the result that many students should have a point of view whether materials, activities, and procedures are to achieve goals of lessons and even the course of study. They also need to pay attention not only to teacher's behaviors but also subject teaching, particularly English language teaching. In addition, students have to improve their English skills for teaching English: Classroom English, English proficiency for English language class, and strategies to prompt children's understanding in English.

１．はじめに

2019年度からの小学校教職課程では、外国語（英語）コアカリキュラムに「外国語の指導法」が必修化され、指導技術や授業づくりに必要な知識・技術も身に付けることとなった。「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書（東京学芸大学，2017）には、学習形態として、①授業観察、②授業体験、③模擬授業を必ず盛り込むこととすると記述があり、これまで以上に指導技術の向上が重視される。そこで、本研究では、小学校外国語活動・外国語の模擬授業の観察を通して、ICT機器（株式会社フォトロン開発PF-NOTE及び学習管理システムMoodle）を活用した学生フィードバックから、学生がどのような視点で模擬授業を観察しているのかを分析し、小学校教員養成レベルで求められる指導技術向上について考察する。

２．模擬授業及び学生フィードバックについて

まず、ICT機器を活用した授業について、吉田ら（2014）では、「外国語活動では、録画再生により、自己の発音や活動内容を、振り返りのためのツールとして活用できる。」（p.14）と述べている。この記述は小学生を対象とした外国語活動での記述ではあるが、教員養成においても、同様の効果があると考えられる。そのため、学生は自分自身の模擬授業録画の再生により、自己の振り返りに活用できる。

学生によるフィードバックについては、中井（2015）は、「他の学生からのフィードバックは、学生に主体的な学習の改善を促す効果があることが分かっており、多くの授業で取り入れられていま

[*1] くらしき作陽大学 子ども教育学部　Faculty of Childhood Education, Kurashiki Sakuyo University

す。」（p.58）と述べており、教員からのフィードバックのみではなく、学生からのフィードバックについても効果があることを指摘している。さらに、佐藤（2017）は、「リアルタイムに他の学生の意見や考えを知ることは、多様な考え方があることに気付くと同時に、自身の考えを見直す機会としても活用することができていると考えられる。」と述べており、即時に学生にフィードバックすることの有効性についても指摘している。

これらの指摘に基づき、主体的な授業改善の促進、自己の発音や活動内容の振り返り、他の学生の意見を知ることにより、多様な考えへの気付きや自分の考えを見直す機会としての活用など、模擬授業後にその授業のフィードバックを学生に行うことの効果が期待される。

3．学生フィードバックに活用したICT機器

学生によるフィードバック、リアルタイムのフィードバックが可能なICT機器として、株式会社フォトロンが開発・製造したアクティブラーニングシステム「PF-NOTE」（Power Feedback Note）を活用した。これは、模擬授業を映像として録画記録し、さらにその授業を観察している学生の反応を授業の進行に合わせて即時に記録・反映することができる。授業者の学生は録画した模擬授業を、実施後に再生しながら振り返ることができ、観察役の学生のリアルタイムなレスポンス（評価反応）を確認することができる。これによって、良かった点や改善点を中心としたPDCAが可能となるシステムである（図１）。

また、他の学生からの説明型のフィードバックを得られるよう、学習管理システム（Learning Management System：LMS）であるオープンソースソフトウェア「Moodle」を活用した。これは、授業に必要なディスカッションやフィードバック、課題提出や小テストなどのモジュールがパッケージ化されているeラーニングプラットフォームである。授業者を含むすべての学生は、模擬授業後に授業についての多肢選択式および記述式によるフィードバックを行い、そのフィードバック内容を履修学生全員に公開することで、他の学生の考え方や疑問点、また、自分の模擬授業に対する評価などを学生自身で確認することができるシステムである（図２）。

図１　PF-NOTEで模擬授業を録画・リアルタイムレスポンスが行われている例

図２　Moodleで模擬授業後に学生による評価および感想を記述している例

４．研究の目的と方法

（１）研究目的

本研究の目的は、小学校教職課程において、小学校外国語活動・外国語の模擬授業時に、ICT機器を活用した学生フィードバックを行ってもらい、学生がどのような視点で模擬授業を観察しているかについての分析を行い、小学校教員養成レベルで求められる指導技術向上を目指して、学生への指導改善の示唆を得ることである。

（２）研究方法

中国地方のある４年制大学おいて小学校教職課程の「外国語活動」（小学校外国語活動及び外国語の指導法及び英語に関する専門的事項を学習する授業科目）を履修する大学生40名が、2018年７月23日･30日･31日の３日間､小学校外国語活動または小学校外国語の模擬授業を行い､以下の２点でフィードバックを記録した。

①模擬授業を観察しながら、PF-NOTEを活用したリアルタイムのフィードバック（レスポンス）

②模擬授業後に、Moodleを活用した記述式のフィードバック

分析方法として、①のリアルタイムレスポンス分析を行うために、②の自由記述内容について、KH Coder 3.Alpha. 13m を用いて、共起ネットワーク分析を行い、共起関係をグループ化する。そのグループに基づき、①のレスポンスを10秒区間ごとに合計し、それぞれの秒区間において、「良かった点」､「改善が必要な点」それぞれについて分析を行う。なお、分析にあたっては、レスポンスのタイミングにおける、最も当てはまる視点を１つの秒区間あたり１視点となるよう分析を行う。

なお、PF-NOTEのレスポンスデータを10秒区間別に分けた理由は、今回の調査で得られたレスポンス数が秒単位では少なく、10秒程度のまとまりで分析することで効率化を図る必要があったからである。

（３）模擬授業の実施方法

2018年度前期に開講した「外国語活動」の授業では、履修学生42名（内、２名はほとんどの出席が

なく、調査対象としていない）が、13グループ（３～４人で構成）に分かれ、新学習指導要領に対応した小学校外国語教育新教材から合計13単元（題材や教育目的に合わせて任意に執筆者が指定:「Let's Try 1」(Unit 1 Hello!、Unit 3 How many?、Unit 6 ALPHABET)、「Let's Try 2」(Unit 3 I like Mondays、Unit 5 Do you have a pen?、Unit 8 This is my favorite place.、Unit 9 This is my day.)、「We Can 1」(Unit 5 she can run fast. He can jump high.、Unit 7 Where is the treasure?、Unit 9 Who is your hero?)、「We Can 2」(Unit 4 I like my town.、Unit 5 My Summer Vacation、Unit 9 Junior High School Life)）から選び、グループごとに異なる単元の学習指導案を作成した。学習指導案には、単元目標、言語材料、関連する学習指導要領における領域別目標、単元計画、本時案（単元名、目標、準備物、評価の観点、計画）を書くよう指導し、Moodle上にPDFファイルで履修学生に模擬授業前に公開した。その後、３回の授業（90分×３回）で、各グループによる模擬授業を行った。模擬授業の実施手順は以下のとおりとし、学生に指示した。

・２人のTeam Teachingで行うこと（HRT（HomeRoom Teacher：担任教師）とJTE（Japanese Teacher of English：日本人英語教師）又はALT（Assistant Language Teacher：外国語指導助手））。模擬授業時間内で交代しながら、全員が指導者となること。その際、どの役割（HRT、JTE、ALT）であるか観察者が分かるように、目印を付けること。
・教室英語を用いて英語のみで行うこと。ただし、進行上必要な場合の最低限の日本語使用は可能とする。なお、実際の授業を想定し、原稿やメモなどを手に持って模擬授業を行うことを禁止とする（机上であれば許容）。
・Let's Try 1&2、We Can 1＆2 の指定の単元について、Warm-up後の「導入」から始めること。
・デジタル教科書やICT機器も積極的に活用すること。
・８分間程度の模擬授業とすること（導入から始めて10分経過した時点で終了とする）。
・（必要であれば）模擬授業で使用する児童向けのハンドアウトを作成し、児童役の学生に配付すること。
・児童役の学生は別の１グループ（３～４人）が担当し、児童になりきって模擬授業を受けること。
・教師役・児童役になっていない学生は、クリッカーを用いた授業観察に取り組むこと。

（４）学生フィードバックの記録方法

まず、PF-NOTEを活用し、模擬授業の教師役（HRT役及びALT役）の動きについて、映像による録画記録を行うとともに、模擬授業の観察学生によるリアルタイムのレスポンス（評価反応）を記録した。観察学生による評価は、「良い」及び「改善が必要」の２種類のみとした。理由として、学生によるリアルタイムでの評価を行うには、複数の視点があることで直感的な反応ができなくなってしまうことが予想されるため、瞬発性を重視し、直感的に評価することができるよう２種類とした。

また、Moodleを活用し、模擬授業終了直後に、多肢選択式と記述式による評価を行ってもらった。多肢選択式については、岡山県総合教育センター（2013）が作成した「授業づくりのためのチェックリスト」を参考にした。このチェックリストは、学習指導案の検討、公開授業並びに授業後の研究協議の実施における活用を想定して、４つのステップ（①単元（題材）目標の設定、②児童生徒観の明確化、③単元（題材）観・指導観の明確化、④単元展開の構想）と「学習指導案との関連」を示しているものである。教職課程の模擬授業においても、学習指導案の作成や模擬授業を行う上で、参考とすべき点が多くある。岡山県総合教育センターが作成したチェックリストでは、「授業前」の学習指導案確認に８項目、「本時の授業」の授業の流れに沿った確認で12項目、「授業後の協議の視点」の振り返り項目５項目を挙げているが、本研究では、今回の模擬授業の実施形態や教員養成レベルに求められる項目として、「授業前」として次の３項目、「本時の授業」として次の３項目を抽出し、さらに、外国語教育に関連した２項目を追加し、合計８項目を模擬授業後に回答させた。

【授業前】　○本時の目標は、本時の評価基準の整合している
　　○本時の目標は、単元（題材の）指導計画に即して、具体的に示されている。

○学習過程に沿って、指導・支援の意図、工夫、手立てなどが、具体的に指導されている。

【本時の授業】 ○適切な指示・説明・発問が行われている。
○児童生徒の興味・関心を高めるための導入の工夫がなされている。
○目標を達成するためにふさわしい教材・教具が使われている。

【外国語教育】 ○教師は積極的にClassroom Englishを用いている。
○Team Teaching（HRT & ALT）におけるそれぞれの役割は適切である。

学生に対しては、事前に模擬授業における観察・評価の視点として上記８項目を説明しており、学習指導案を作成する段階においてこれらの項目について意識を向けるように指導した。

記述式については、クリッカーを押した点を中心に「良かった点」及び「改善が必要だと感じた点」についての記述および感想を入力してもらった。多肢選択式と記述式の回答内容については、学生（匿名）によるフィードバックを即時に集計し公開した。授業後、学生は、自分の模擬授業の録画を視聴・閲覧をし、模擬授業での映像、観察役の学生のリアルタイム評価（「良い」及び「改善が必要」）及び記述評価を確認することができる。これにより、自らの模擬授業の振り返りを行うことができるだけでなく、客観的な意見としての学生のリアルタイム評価についても、なぜそのように評価したのかについて学生自身が考察することもできる。

５．結果と考察

まず、各模擬授業後に、Moodleで得られた記述式の学生によるフィードバックを活用し、共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワーク分析では、PF-NOTEにおけるリアルタイムレスポンスの学生フィードバック分析を行うため、観察の視点をより明確にする必要がある。分析にあたっては、まずKH Coderを用いて、抽出語リストを作成し、学生の記述内容を確認しながら、学生の誤字（HLT→HRT）や同義語（子ども／生徒→児童、教師→先生、映像→動画、英単語→単語）、仮名表記（気づ→気付、はなしている→話している、出来→でき）について内容を吟味し、分析に影響しない形で、記述内容の修正を行っている。

まず、模擬授業（グループ）ごとの共起ネットワークを調査した。指導に関連したキーワードとして、「良かった点」（図３）について、「発音」、「単語」、「楽しい」、「分かる」といった語が頻度として多くあり、「改善が必要な点」（図４）について、「HRT/ALT」、「説明」「活動」といった語が頻度として多くあることが分かる。しかしながら、記述においても同様であるが、模擬授業ごとに学生の観察の視点が異なっている点が多くあったため、共通項として考えることができなかった。そのため、すべてのグループに共通している共起関係を「良かった点」、「改善が必要な点」それぞれ分析を行った。模擬授業別の共起ネットワークにおけるDegreeも参考にし、その結果、得られた共起ネットワークを「良かった点」、「改善が必要な点」それぞれ、次の４点を抽出した（図５、図６）。

【良かった点】
・教師の説明や発話の方法
・アクティビティの進め方
・教材の提示・活用の方法
・新出言語材料の導入の方法

【改善が必要な点】
・教師の説明や発話の方法
・アクティビティの進め方
・教材の提示・活用の方法
・Team Teachingの進め方

これらの点をPF-NOTEのリアルタイムレスポンス分析の視点として活用した。

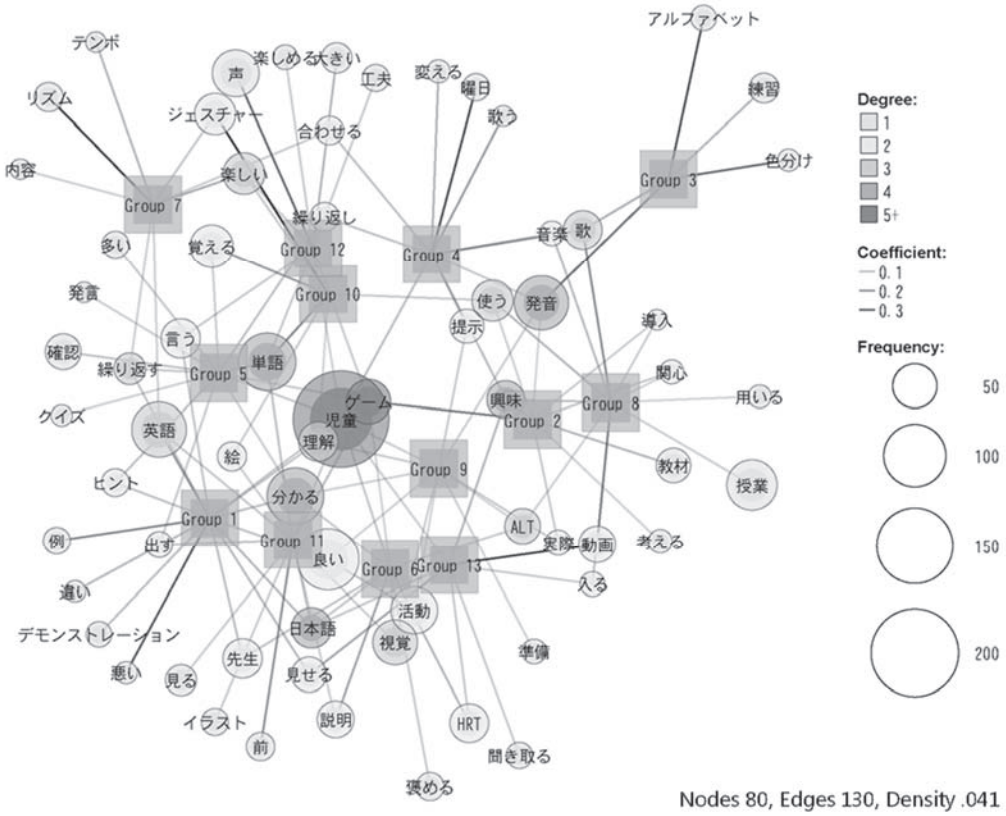

図３　良かった点（模擬授業グループ別）共起ネットワーク

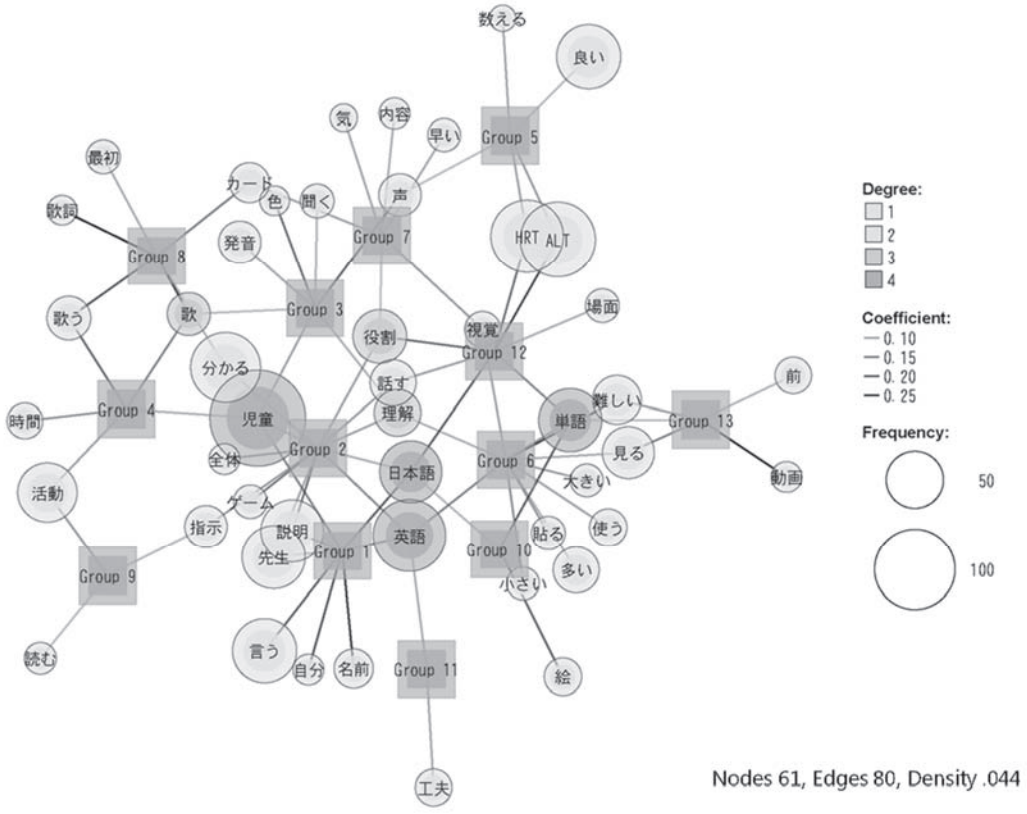

図４　改善が必要な点（模擬授業グループ別）共起ネットワーク

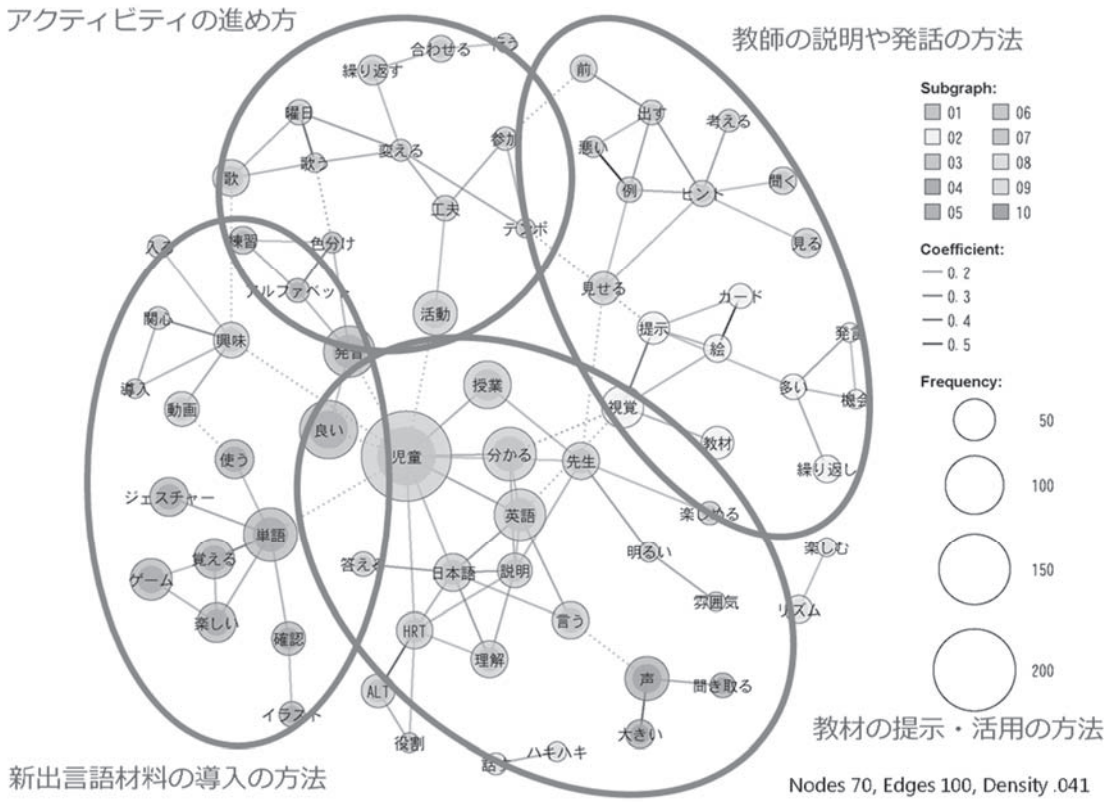

図５　良かった点（全体）共起ネットワーク

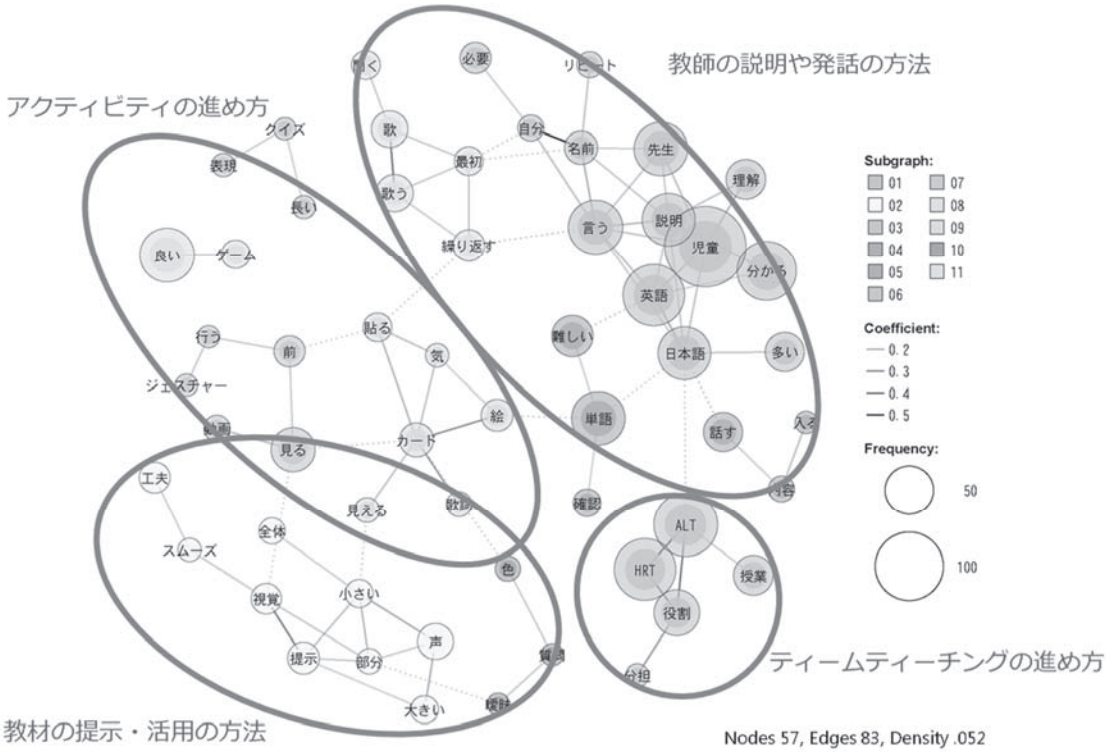

図６　改善が必要な点（全体）共起ネットワーク

表１　PF-NOTEにおける模擬授業別レスポンス回数

グループ	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G11	G12	G13	**Total**
Eval: 良い	118	35	224	202	170	261	224	108	229	210	351	160	151	**2443 (57%)**
Eval: 改善が必要	61	338	85	122	55	109	80	172	232	139	118	307	54	**1872 (43%)**
Total	**179**	**373**	**309**	**324**	**225**	**370**	**304**	**280**	**461**	**349**	**469**	**467**	**205**	**4315**

*Eval = Evaluation（評価）

表２　リアルタイムレスポンスの分析結果

Eval	グループ	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G11	G12	G13	**Total**
良い	教師の説明や発話の方法	40	16	85	45	48	122	60	28	103	42	111	46	63	**809 (33%)**
	アクティビティの進め方	45	8	95	110	40	42	58	38	83	25	99	64	0	**707 (29%)**
	教材の提示・活用の方法	19	9	0	6	55	52	60	29	12	34	83	27	78	**464 (19%)**
	新出言語材料の導入の方法	14	2	44	41	27	45	46	13	31	109	58	23	10	**463 (19%)**
改善が必要	教師の説明や発話の方法	61	313	76	71	45	80	18	111	222	66	80	161	12	**1316 (70%)**
	アクティビティの進め方	0	0	0	51	0	0	18	0	10	4	0	0	16	**99 (5%)**
	教材の提示・活用の方法	0	0	0	0	0	23	44	61	0	51	38	0	26	**243 (13%)**
	Team Teaching の進め方	0	25	9	0	10	6	0	0	0	18	0	146	0	**214 (11%)**

続いて、リアルタイムレスポンス分析を行った。PF-NOTEのクリッカーを活用して、学生が各グループの模擬授業において行ったレスポンス回数は表１である。各模擬授業における１人あたりのレスポンス平均値は、12.5回となっており、８～10分の模擬授業であるため38～48秒に１回のペースで学生は反応していたことになる。ただ、クリッカー別に見ると、１つの模擬授業においてまったくレスポンスのない学生もいれば、最大で137回レスポンスを行った学生もいるため、学生による差が大きくある。

次に、リアルタイムレスポンス分析を行った結果が表２である。分析において、「良い」と反応した具体的な場面は次の通りである。

ア　教師の説明や発話の方法（33%）
- ・教師役が“Team 2 is the winner.”と言って、クラスが拍手をしている。
- ・教師役が、児童役の質問に答えている。
- ・教師役がクイズにおいて児童役にヒントを与えながら、答えに誘導している。
- ・児童役が単語を英語で答えられないとき、“In Japanese, OK.”と支援している。
- ・教師役が、児童役の大きな声や発言内容を褒めている。
- ・教師役が、児童役の理解状況を確認している。

イ　アクティビティの進め方（23%）
- ・単語の練習を繰り返し行う。
- ・目標表現を繰り返す際に、子どもたちにも練習に取り組むよう促している。

・ABCソングを歌う。
・全体練習から個別練習に切り替えたタイミング。

ウ　教材の提示・活用方法（19%）
・デジタル教科書を用いて、発音練習をする。
・ピクチャーカードの提示をする。
・活動の取り組み方について、HRT役とALT役とでデモンストレーションを行う。

エ　新出言語材料の導入方法（19%）
・色の導入において、教師役が“What color is this?”、“How many colors do you have?”と尋ねている。
・新出単語の導入後、“What's this?”と言って、単語の意味を確認する。

また、「改善が必要」と反応した具体的な場面は次の通りである。

ア　教師の説明や発話の方法（70%）
・教師役が“Look me.”と繰り返す。Ms.と Mr.を間違える。※文法の誤りもそのまま表記。
・説明が簡単すぎて、あるいは説明の英語が難しすぎて、児童役がゲームのルールを理解できていない。
・教師役やALT役が、台本ばかり見て授業を進めている。
・授業で次に何をするのかを、十分に頭に入れていないため、授業がスムーズに進まず、間が空く。
・ALT役であるにもかかわらず、日本語を多用する。英語で進める準備ができていない。
・ペア活動のとき、教師役が活動しているペアに十分気を配っていない。

イ　アクティビティの進め方（５%）
・動画を見せるが、何に気を付けて見ればよいのか、何も指示がない。
・新出単語を数回繰り返したり、同じ歌を何回も繰り返したりするなど、単調な繰り返しが続く。
・歌詞カードを貼っている場所が動画の映っている場所と重なって、見づらい。

ウ　教材の提示・活用方法（13%）
・絵カードや単語カードが小さく、見えにくい。
・単語カードを並べるが、ごちゃごちゃしていて見づらい。
・単語付き絵カードを用いて、絵だけを見せて単語を言わせる活動があるにもかかわらず、単語を隠せるよう準備ができていない。

エ　Team Teachingの進め方（11%）
・ALT役が日本語も話し、HRT役の役割がなくなっている。

この分析結果から、「良い」と反応しているものは、「教師の説明や発話の方法」が最も多い割合であるものの、他の３つの視点についても、模擬授業において学生は意識しながら観察をしていると考えられる。しかしながら、「改善が必要」と反応しているものは、「教師の説明や発話の方法」が70%を占め、他の３つの視点について、特に、「アクティビティの進め方」については授業観察の視点としては、十分に意識が向けられていないと見受けられる。また、「アクティビティの進め方」、「教材の提示・活用方法」、「Team Teachingの進め方」については、７～８グループにおいて、無反応（レスポンス数が０）となっており、教師の説明や発話の方法に対する観察時の注意・関心が強くなる傾向であることが分かる。

最後に、「授業づくりのためのチェックリスト」に基づく学生フィードバック分析である。チェックリストへの回答についての集計結果が表３であり、グループごとに回答数に差があることが分かる。

本論では各グループ差の詳述が目的ではないため省略するが、全体を見ると、「適切な指示・説明・発問が行われている」、「Team Teaching（HRT & ALT）におけるそれぞれの役割は適切である」について回答数が少ない。こうした点から、模擬授業の前段において、指示や説明、発問の方法、Team Teachingにおける役割については、しっかりと指導しておくことが必要である。ただし、指示・説明・発問については、リアルタイムレスポンス分析においても同様の傾向があり、教師の説明や発話に対する注意・関心が強く、チェックリストにおいても他より回答数が少ないのは、学生として、厳しく評価しているからではないかと思われる。

上述の分析結果および考察より、小学校教職課程における指導技術向上を目指し、次の２点を示唆しておきたい。

１点目は、「模擬授業における観察の視点」についてである。まず、教材・教具、内容、進め方が、目標達成が可能なものであるかどうかという視点を持たせる必要がある。また、授業目標だけではなく、学習指導要領の目標との関連性についても意識を向けさせなければならない。さらに、授業の雰囲気や教師の笑顔や声といった汎用的な授業観察の視点ではなく、教科教育、特に、英語指導に特化した視点を持たせる必要がある。例えば、理解可能なインプットの提供や発達段階に応じた教授法の活用、場面と言語材料の適切さなどについての視点を事前に教示しておく必要がある。

２点目は、「指導技術向上のための必要条件」についてである。指導技術向上のために学生に求められるものとして、指導するために必要な英語力、具体的には、①教室英語の活用、②相手を意識してルールや活動の説明できる英語力、③児童が理解していない場合にHRTの日本語による説明に頼ることなく英語での言い換えや児童の理解確認などができる英語力、などが挙げられる。また、教材の作成・活用法の技術を身に付けることも必要であり、具体的には、学習段階に応じた文字と絵のバランス、デジタル教科書の効果的な活用などが考えられる。

表３　「授業づくりのためのチェックリスト」集計結果

グループ／回答者数	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G11	G12	G13	Avg.	**Total**
	38	37	37	37	37	37	36	36	37	37	38	38	38	37.2	**483**
本時の目標は、本時の評価規準と整合している	26	24	30	25	31	26	24	21	22	21	28	26	30	25.7	**334**
本時の目標は、単元（題材）の指導計画に則して、具体的に示されている	24	25	23	21	27	28	27	24	27	25	26	25	29	25.5	**331**
学習過程に沿って、指導・支援の意図、工夫、手だてなどが、具体的に指導されている	28	9	25	15	28	25	25	21	26	24	26	29	23	23.4	**304**
適切な指示・説明・発問が行われている	28	7	24	13	27	23	27	18	24	17	22	17	22	20.7	**269**
児童生徒の興味・関心を高めるための導入の工夫がなされている	18	11	22	23	27	24	25	24	29	20	30	31	32	24.3	**316**
目標を達成するためにふさわしい教材・教具が使用されている	26	21	30	30	32	27	27	27	25	21	27	27	31	27.0	**351**
教師は積極的に Classroom English を用いている	22	14	29	15	26	22	23	19	24	19	32	22	26	22.5	**293**
Team Teaching（HRT & ALT）におけるそれぞれの役割は適切である	23	2	26	18	15	22	18	22	24	18	24	10	28	19.2	**250**
Total	**195**	**113**	**209**	**160**	**213**	**197**	**196**	**176**	**201**	**165**	**215**	**187**	**221**	**188.3**	**2448**

6．おわりに

本研究では、小学校外国語活動・外国語の模擬授業において、ICTを活用して学生が記述したフィードバックの分析を行うことを通して、小学校教員養成レベルで求められる指導技術向上について考察を行い、今後の教科教育指導に生かすことができる具体的な方法について理解を得ることができた。

最後に本研究の課題を３点述べたい。

１点目として、学生の授業後の感想には、「授業」、「雰囲気」という言葉に、「楽しい」、「明るく」、「スムーズ」という形容の言葉が付いているものが多かった点がある。漠然とした授業の雰囲気ではなく、焦点をさらに絞った上で授業観察をさせ、学生に対しては、事前に提示する授業づくり及び観察の視点を、より一層精査し、丁寧に指導していくことが必要である。また、授業づくりや観察においては、学習指導案でしか観察できない視点と、模擬授業でしか見られない視点があることも大学教員は理解し、学生に指導していかなければならない。

次に、PF-NOTEの撮影範囲がホワイトボードと教卓を含む範囲のみとなっていたため、児童役の様子を分析時に確認することができなかった点である。このため、視点分析材料が不十分であったことも否めない。また、PF-NOTEにおけるレスポンスは、学生が模擬授業観察に集中してしまったために、反応数が少なく、さらに、先述したが学生によって回答数の差が大きく、分析データとして信頼に欠ける部分があったことも否めない。

最後に、分析方法としての課題も残る。リアルタイムレスポンス分析を４つの視点で行ったが、自由記述式のフィードバックには現れていない視点も当然ある。また、１つの10秒区間に１つの視点として分析したが、複数の視点が混在しているものも多くあったため、分析方法については再考する必要もある。さらに、学生個人の記述内容における語の出現率を調査することで個々の傾向を把握し、全体指導に役立てられるのではないかと考えている。

今後、本研究の成果として得られた「学生フィードバック分析結果に基づく英語指導技術向上のための指導」について、小学校教職課程の学生に対して実際に指導し、授業観察時の視点の改善や指導技術の向上に寄与させていきたい。また、今後の研究として、学生フィードバックが模擬授業を行った学生にどのような効果があったのかについても調査・研究する必要がある。

参考文献・引用文献

岡山県総合教育センター（2013）．授授業づくりの基礎・基本―学校全体で授業改善に取り組むために―．Retrieved on November 24, 2018 from http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/chousa/study/12-01.pdf

佐藤大介（2017）．外国語活動の指導法におけるアクティブ・ラーニングとICTの効果的活用～教員養成カリキュラムの改善を目指して～．日本児童英語教育学会第37回秋季研究大会資料集．87－90.

東京学芸大学（2017）．文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書.

中井俊樹（2015）．シリーズ大学の教授法３　アクティブラーニング．東京：玉川大学出版部.

樋口忠彦，髙橋一幸，加賀田哲也，泉惠美子（2017）．Q&A　小学校英語指導法事典―教室の質問112に答える―．東京：教育出版.

吉田晴世，野澤和典（2014）．最新ICTを活用した私の外国語授業．東京：丸善プラネット.